「カイロ通信」第 8 号　　［2026 年 8 月 27 日記］

鳥をめぐる話

日本学術振興会カイロ研究連絡センター長　長沢 栄治
（前・信州イスラーム世界勉強会代表）

〔“笑い鳩”への恨み〕

8 月となった。いつしか燕の飛ぶ姿が見えなくなった。気温がさらに上がったためかもしれない。その行方は分からない。雀、鳩、鴉という、日本でもお馴染みの鳥ばかりが、暑さに耐えて暮らしている。鴉については、小鳥の雛をつついているという話を聞いてからは、ここでもそうなのか、と評価を落とした。さらにがっかりしたのが鳩である。ベランダでガルギール（ルッコラ）を大事に育てていた。どうも様子がおかしいと思っていたところ、伸びた芽をほとんど食われてしまった。一回目は無事に収穫して、サラダに入れて楽しんでいたが、二回目を鳩に目をつけられたのである。

犯人の鳩は、調べてみると、「笑い鳩 laughing dove」という種類だというから、人を馬鹿にしている。アラビア語では、おそらくこの「笑い鳩」の直訳のヤマーマ・ダーヒカ、あるいは「椰子の木鳩」（ファーヒタ・ナヒール）など、いろいろな名前で呼ばれている。普通の鳩、ハマーマに対し、ヤマーマ（山鳩）はスリムな鳩、ファーヒタの方は、小さな山鳩の古名であり、預言者ムハンマドの叔父アブー・バクルの娘にも付けられた（預言者は当時、貧乏だったのでこの従妹に結婚を申し込んだが断られた）。さらに中国では「棕斑鳩」、“茶色の斑点のある鳩”という名前が付けられているという。地味な羽色、スリムで小柄な、可愛らしい鳩である。これまで憎からず思ってきたのに・・・。

鳩といえば、この“笑い鳩”など野生の鳩とは別に、エジプトでは食用と趣味用、あるいは両者兼用のさまざまな種類の鳩が飼われている。食用鳩の住まいは、農村の風物詩、鳩の塔（ボルグ・ハマーム）である。尖塔状以外にも、“団地風”の形など地方によって特色がある。白塗りの土壁に素焼きの壺をたくさん差し込んでねぐらを提供し（塔の内側から見るとハチの巣状になっている）、餌は周辺の畑から自己調達してもらう。獣からも襲われることなくセキュリティは抜群。とくに酷暑の夏、塔の中は涼しくて快適な鳩の宿泊施設である。ところが、そこで鳩たちがくつろいで休んでいるところを捕まえて食べてしまう。まことに悪辣な構造となっている。

西部沙漠のオアシス農村の鳩の塔
2006 年 9 月撮影

鳩の塔は、以前に本で読んだところでは、古代ペルシアにルーツがあり、塔内に溜まった鳩の糞を肥料に使うためることも目的の一つであったという。しかしどうも、エジプトではそうではなさそうである。また、40 年以上前になるが、しばらくご厄介になった、スーダン・オムドルマンの庶民街の家で、鳩の巣に石油缶を使っていたことを思い出す。おそらくそれは競技用の鳩ではなく、食用だったのではと思う。

エジプトにおける鳩の飼育の歴史は、当然ながら長い。古代エジプト、紀元前 3000 年の古王国第 5 王朝時代にすでにその記録があるらしい。伝書鳩は、紀元前 30 年にプトレマイオス朝を倒して、エジプトを統治したローマの初代皇帝アウグストゥスが使い始めたとも言われる。その後、時代は下ってファーティマ朝期（10〜12 世紀）には伝書鳩による郵便制度が全国的に整備された。趣味の競技用鳩の飼育の起源は、分からないが少なくとも 14 世紀、マムルーク朝期には、すでに熱狂的な鳩マニアがいた。バフリー・マムルーク朝のスルタン、ムザッファル・ハーッジィー（1331-47 年）である。父の後を継いで 1346 年にスルタン位についたものの、鳩遊びに夢中になって政務を怠り、部下のマムルークたちの不満を買い、在位わずか一年で誅（ちゅう）殺された。

そうした歴史に懲りずに、現在のエジプトでも鳩マニアは絶えない。カイロの庶民地区では、ビルの屋上に建てられた、立派な鳩小屋（ギーヤ・ハマーム）があちらこちらに見られる。鳩を飼育し、訓練するための大きな木枠の鳩舎であり、中にはペンキでカラフルな色づけをされ、さまざまな意匠を凝らしたものもある。長距離レースを競ったり、また鳩の群れを飛ばし合って、自分の鳩小屋に誘引して鳩の数を増やしたりするなどのマッチが組まれているようだ。

イスラミック・カイロのズウェイラ門の上から見たビルの上の鳩舎（ギーヤ・ハマーム）　2025 年 12 月撮影

このエッセイでも何回か言及した、筆者が翻訳中の社会学者、サイイド・オウェイスの自伝『私が背負った歴史』には、こうした競技用の鳩の種類が記されている。カッターウィー（カッター［サケイ（沙鶏）／砂雷鳥］の名前に由来）、カマリー（コキジバト）、シャクラバーズ（小柄で宙返りが得意）、そして食用にもなる白羽毛のルーミー（トルコ系）などである。自伝の中には、1930 年代当時のカイロでは生活に困窮した人が鳩の投機的な売り買いで生計を立てていた、という話で登場する。前号（第 7 号）で紹介した、ガザから来たパレスチナ人が外では労働許可が取れないので、室内でインコを繁殖する商売を考えついたという話にも少し似ている。当時から、鳩の市場は城塞の麓（ふもと）の、サイイダ・アーイシャ廟近くにあった。その後、高架道路の下に移動した

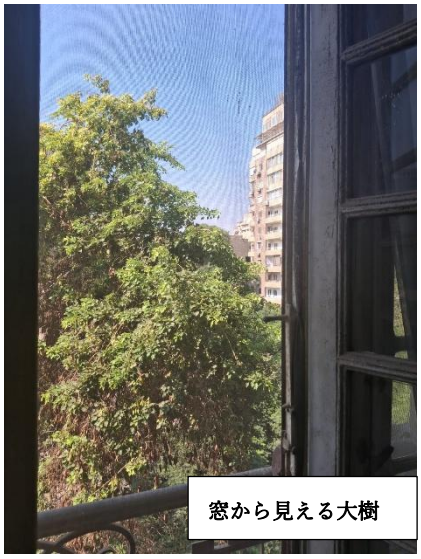
が、最近、カイロ県が鳩と観賞魚の市場を新設したとの報道がある（「ヨウム・サーベウ」紙 2026 年 4 月 20 日）。

〔カイロの“ナイチンゲール”、ブルブル〕

先ほど、酷暑の夏、いるのは雀、鳩、鴉ばかり、などと書いてしまったが、ビルの間の葉陰には他にも鳥が棲んでいる。その中で、一年を通して美声を響かせている鳥には、昨年から気になっていた。住居の間近まで伸びている大木の茂みは、今年の春先は“燕のお宿”となっていて、夜、寝ぼけてはいるが鋭い声が聞こえていた。しかし、昨年はくぐもった美声が、窓の明かりに照らされた樹の葉陰からもれていた。この鳥はナイチンゲールなのか、と思ったりした。

45 年前の 1981 年、初めてエジプトに長期滞在していた頃、住んでいたのは、ナイル川を渡った西側の新興住宅地区、モハンデシーン（エンジニア・シティ）である。当時は建物の多くが一戸建てで緑も多く、のどかな雰囲気だった。ビルだらけとなった今では考えられないが早朝、ミルクを絞るためか、水牛が列をなして通りを歩いているのを見かけたこともある。しかし夜が更けると、黒い街路樹の葉陰の間を、ケタケタケタと奇怪な声で鳴きながら渡っていく鳥がいるのに薄気味悪さを感じた。これはナイチンゲールなどではあるまいと思ったのを覚えている。

さて、家の近くの美声の主は、いろいろ調べた結果、ブルブル（Bulbul）という名の鳥だと言ってほぼ間違いがなさそうである。あるときベランダの欄干に留まっている姿を間近で見ることができた。薄茶色かオリーブ色かの地味な羽色で、スラっとした 20 センチあまりの鳥だった。ブルブルとは、英語ではヒヨドリ類のことを意味する。しかし、このカイロのブルブルは、日本の鵯（ヒヨドリ）のように、ときには鴉にも向かっていく気性の荒い鳥ではなく、上品な雰囲気が感じられる。贔屓（ひいき）目かもしれないが。


窓から見える大樹

ブルブルは、元々はペルシア語の Bolbol（あるいは Bolbel）が語源のようである。それがアラビア語やトルコ語、ヒンディー語に入って Bulbul となり、近代西洋の鳥類学においてヒヨドリ科 Pycnonotidae の鳥の総称として使われるようになったらしい。アフリカ大陸から、北限の日本までさまざまな種類があり、現在でも分類の調査や研究が進行中である。

たとえばその一つ、インドの「尻赤鵯（シリアカヒヨドリ）」は、ヒンドゥー教では宗教的な役割が与えられており、収穫の感謝祭の際に人々の幸を祈って放鳥される。その赤い尻（下尾筒）の羽毛が太陽神のお使いとして見なされるのであろう、まことにお目出たい鳥なのであるが、果樹への食害から日本では特定外来生物に指定されている。

では、カイロのブルブルの種類は何かというと、英語で Common Bulbul、つまり“よく見られる普通のブルブル”という取り付く島もないような名前が付けられている（アラビア語も直訳のブルブル・シャーイウ)。高野晶弘さんが遺した『高野版アラビア語大辞典』によれば、ブルブルとは「ヒヨドリ科に属する美声の鳥、体長 20cm ほどで頭部が黒い」、さらには「(取っ手付きの水差しの）注ぎ口（の部分)」とか「[シリアでの用法］独楽（の類い)」と言った意味がある、としている（154 頁)。

ただし、この「頭部が黒い」ブルブルとは、カイロの「普通のブルブル」ではなく、「アラビアヒヨドリ」を指すのではないかと思う。シリアには、トルコ国境近くにブルブルという町があるようで、シリアをはじめとして、レバノンやパレスチナ、さらにはアラビア半島やトルコ地中海沿岸にかけて一般に見られるブルブルの種類である。また、ブルブルの語源となったイランのブルブル（ボルベル）は、white-eared bulbul（直訳すれば「シロミミヒヨドリ」）と名づけられ、黒い頭部に耳の形をした白い羽毛がある。 正式の和名があるか分からないが、ホホシロヒヨドリと言ってもよいかもしれない。ペルシア語では、ボルベル・ハルマー、「椰子の木ヒヨドリ」というらしい。このイランのブルブルは、アラビアヒヨドリと同じく、頭部が黒く、そして形がずんぐりしているところも似ている。

一方、スマートな体形のエジプトの「普通のブルブル」は、中国語では、非洲羽須鵯（アフリカヒメウソ）と呼ぶそうだから、シリアの「アラビアヒヨドリ」に対して「アフリカヒヨドリ」と言ってもいいかもしれない。おそらく古代文明以来、ブルブルたちの棲息範囲は、それほど変わっていないだろう。そう考えると、ブルブルの種類の違いは、アフリカ・ナイル川のエジプトと、メソポタミアやペルシアの風土の相違とも関係しているかもしれない。

ブルブルは、しばしばナイチンゲールと呼ばれることがある。しかし、西洋のナイチンゲールとは異なる。一般にナイチンゲールには二種類あり、それぞれヤブサヨナキドリ（ツグミ・ナイチンゲール）とサヨナキドリ（ナイチンゲール）と呼ばれる。いずれも同じスズメ目だが、ヒヨドリ（ブルブル）科ではなく、ヒタキ科に属し、アラビア語では「アンダリーブ」と「ハラーズ」と名を付けられている。いずれもエジプトには長期滞在することはなく、ヨーロッパで繁殖し、アフリカで越冬するために春と秋、シナイ半島やエジプト北部にちょっと立ち寄るだけのようでである。

アラビアヒヨドリ　　シリアカヒヨドリ
アフリカヒヨドリ　［写真から模写］

〔“褐色のナイチンゲール”と呼ばれた歌手〕

カイロのブルブルが鳴き渡る家からすぐ近くの通りに、ザマーレクの名所の一つとも言

ってよい「褐色のナイチンゲール」の記念館がある。ナセル時代に一世を風靡した歌手、アブデルハリーム・ハーフェズ（1929-77 年）が晩年を過ごした家である。「カイロ通信」の第 6 号で紹介したエドワード・サイードが少年時代に一時、住んでいた五階建てのビルは、その隣に位置する。この 7 階建ての「ザフラー・ゲジーラ（中州島の咲き匂う花）」ビルの最上階に「ハリーム・ハウス」はある（公式サイト：https://www.halimhouse.com/）。「お魚公園」に面したこの記念館は、あまりにファンの訪問が多いので、開館日は限定されて入館は予約制となっている。

“ハリーム・ハウス”のある「ザフラー・ゲジーラ」ビル

この不世出の人気歌手、アブデルハリーム・ハーフェズは長年、患っていたエジプトの風土病、住血吸虫病のために 1977 年 3 月 30 日にこの世を去った。カイロ中心街で行なわれたその葬儀行列への参列者は、1970 年のナセル大統領の葬儀、そして 1975 年の大歌手「東洋の星」ウンム・クルスームの葬儀にも匹敵する、凄まじい多さだったという。葬儀行列に向かって、バルコニーから飛び降り自殺を試みた若い女性が少なくとも四人いたと伝えられている。こうした国民からの圧倒的な関心を集めた葬儀行列としては、それ以前は、かなり昔になるが、1919 年革命の指導者、サアド・ザグルールの葬儀（1927 年）が匹敵するくらいであろうか。オウェイス自伝『私が背負った歴史』には、その目撃談が書いてある。行列を上から見ると、白いターバンの河が流れる中を、タルブーシュ帽（トルコ帽）が赤い魚のように泳いでいるように見えた、と著者は少年時代の記憶を語っている。

ハリームの死から約半世紀経つが、これほどの大規模な葬儀行列は記憶にない。その後のエジプトには、時代を自らの身に映すようなキャラクターが現れることはなかったし、またそうした時代そのものが過ぎ去ってしまったのかもしれない。2011 年革命でエジプト・ナショナリズムは瞬間風速的に盛り上がった。ただしその後は、政府による国威発揚の掛け声だけがただ空しく響いているように感ずる。

さて、ハリームに「褐色のナイチンゲール（アンダリーブ・アスマル）」というネックネームを付けたのは、ムハンマド・バディーウ・シルビーエというレバノン人のジャーナリストであった。1953 年に週刊芸能誌『マウエド』を創刊した彼が、ハリームについての記事を執筆中に、たまたまナイチンゲールの鳴き声がベランダから聞こえてきたことから思いついたのだという。調べてみると、「アンダリーブ」すなわちヤブサヨナキドリ（ツグミ・ナイチンゲール）は、たしかにレバノンのベカー高原あたりに、春から夏にかけて渡りの途中で逗留するらしい。また、「アスマル」つまり「褐色」あるいは「小麦色」の形容についてだが、写真などで見る限り、ナイルデルタのシャルキーヤ県出身のハリームはそれほど浅黒くは見えない。しかし、色白のレバノン人にはそのように思えたのかのかも

しれない。そして小麦色の肌が示す、いつまでも若々しく健康そうに見える歌手が、病魔に侵されていたとは誰も想像しなかったのだろう。

それにしても、ハリームには「褐色のナイチンゲール」ではなく、「褐色のブルブル（ヒヨドリ）」の名前を付けてほしかったと思う。しかし、本人が納得して、コンサートで自ら名乗っていたそうだからしかたがない。そこでまた調べてみると、「褐色のブルブル」の名前を付けられた人物がいた。内戦下のシリアで「革命のゴールキーパー」とも呼ばれた元サッカー選手のイスラーム主義者、アブデルバーシト・サールート（1992-2019 年）である。反アサド武装闘争に加わった彼は、反シーア、反アラウィーの歌を唄ったということからその名前を付けられたという。ナイチンゲール、あるいはブルブルの唄う歌もさまざまである。

〔「ブルブルの囀りの声」〕

カイロで聴くブルブルの定番の囀（さえず）りは、ピヨッピー・ピヨピーである。その声を聴くと、なぜか元阪神のスター選手で北の大地の野球監督の名前が頭に浮かんできてしかたがない。ピンピョー・ピヨピー、と。ただ最近、より注意深く聴くようになったせいか、さまざまなパターンの囀りを耳にするようになった。求愛中なのか、それとも練習中なのかは分からない。ピッピッピ・ピヨヨとか、ピッポ・ペピョ、ピッポリョリョ、ポピポピ・ポピョ、ピッポリョ、ピッピョフイ、ピョッピピ、ピヨッペピョなどである。動画サイトなどで見ると、シリアのブルブルの囀りの方が可憐であるが、その鳴き声はあっさりしているように感じる。

ブルブルの語源の地、イランでは昔から、ブルブル（ボルベル）を題材にしたペルシア語の詩が数多く歌われてきたという。一方、アラビア語の詩の中で、もっとも有名なブルブルに関する長詩（カシーダ）は、文人アスマイー（740-828/833?年）の「ブルブルの囀りの声（サウト・サフィール・ブルブル）」だと言われる。アッバース朝の第二代カリフ、アブー・ジャアファル・マンスール（在位：754-775 年）に献じた詩である。

カリフ・マンスールは、このイスラーム帝国の実質的な創建者であった（詳しくは、高野太輔『マンスール』［世界史ブックレット 020］山川出版社 2014 年を参照）。その権勢に驕（おご）ったのか、詩人を宮殿に次々に呼びつけ、これまでに聞いたこともない詩を吟じるように命じ、その詩を聴くとただちに暗記し自ら吟じてみせた。そして、これはすでに前からある詩ではないか、と難詰して詩人たちを困らせていた。実はカリフ・マンスールは、宮殿の間の見えないところにグラーム（少年奴隷）とジャーリーヤ（少女奴隷）を隠しておいて、二人に詩を覚えさせるというトリックを使っていたのである。

この話を聞いたアスマイーは、ベドインの姿に変装して、カリフの前に立ち「ブルブルの囀りの声」の詩を披露した。聞きなれない言葉や生き物や道具の擬音語、また変わったリズムを入れ込んだ、複雑難解、予測不能なこの詩を、グラームとジャーリーヤは暗記ができず、カリフは降参した。こうしてアスマイーは、カリフを諫（いさ）め、自らは報奨

である大量の黄金を手にしたという話である。

ただし、この話は、詩の内容からアスマイーの作であったか疑う意見もある。また、カリフ・マンスールとの関係が本当にあったかなど、信ぴょう性に問題があるという。しかし、それはともかく、ブルブルが囀る歌に、アラブ人が昔から魅了されてきた歴史を示す作品だということに間違いがないであろう。自らの語学能力と文才の貧しさを省みずに詩の最初の部分（比較的易しいところ）を訳してみる。

アスマイー「ブルブルの囀りの声」

ブルブルが囀る声が　　＊＊＊　　私の昂ぶる身体を震わせる
水と花が溶けあうように　＊＊＊　　その眼差しの花が
貴方様　ご主人様　　＊＊＊　　ご主人様　我が主君よ

動物行動学者の岡ノ谷一夫氏（理化学研究所）によると、あらゆる動物の中で音楽を聞いて自然に身体を揺らすのは、鳥と人間だけであるという（小川洋子『カラーひよことコーヒー豆』小学館文庫 2012 年)。ブルブルは、オペラ歌手のように自らの身体全体を楽器として使って美しく囀る。その声は聴く人にその身体を震わせるほどの感興（タラブ）を与える。ブルブルの言葉は、この鳥の歌声に由来するといわれるが、もしかしたら、この感興がもたらす身の震えそのものから来ているのではないか。アスマイーの詩の第一句を読むとそのように思ってしまったのである（タラブ概念については、飯野りさ『アラブ古典音楽の旋法体系』スタイルノート 2017 年を参照)。

【追記】

鳩の名誉回復のために追加で一言。本エッセイを書き終えた日に、学振懇話会（日本学術振興会カイロ研究連絡センターによる一般向けセミナー）が開催された。講師は、学振事務秘書を長らく務めてきたサブリーン・アリーさん、「アッラーへの道を進む　心の礼拝」が講演のタイトルだった。ちょうど一年前、預言者生誕祭に合わせて彼女が参加したウムラ（小巡礼）ツアーの体験談である。講演の中で紹介された映像の一つに、マッカ（メッカ）やマディーナ（メディナ）の広場に、鳩がたくさん群れている光景があった。なぜ鳩たちは信徒たちに可愛がられているのか。その質問に対する答えは、預言者ムハンマドがマッカで迫害を受けてヒジュラ（聖遷）を行なったときの故事に由来するからだという。マッカの南の郊外にあるサウル山の洞窟に、預言者と初代カリフとなるアブー・バクルが隠れたとき、入り口に蜘蛛が巣を張り、鳩が卵を産んだ。この神による計らいにより、洞窟の中には誰もいないと思わせ、クライシュ族の追及を逃れることができた、という逸話である。さらに調べてみると、この故事を信じる敬虔なムスリムは、鳩を可愛がるだけではなく、蜘蛛もまた大事にしているということも知った。また、マッカで一般的な鳩の種類は、日本ではドバトという名でも知られるカワラバト Rock dove のようである。